

石巻市文化財調査報告書第1集

# 水沼窯跡発掘調査報告

1984年3月

石巻市教育委員会

# 水沼窯跡発掘調査報告

1984年3月

## 序

水沼窯跡は石巻市の北東部にあり、平野部のもっとも奥まった所に位置します。この水沼窯跡のある稻井地区一帯は、古くは縄文時代から中世に至るまでの多くの遺跡が残されており、歴史的風土を形づくっている地域であり、石巻市の歴史を語る証しとなっている貴重な地域でもあります。

本窯跡は、昭和56年7月、土取工事中に発見された遺跡で、丘陵斜面が大きく削りとられ、窯跡断面が露出し崩壊の恐れがあるため国の補助を得て発掘調査を行ったものです。

これまで、この種の窯は、愛知県渥美半島で確認されていただけと聞いており、今回の発掘調査により東北で初めて確認されたものと報告されています。なぜ渥美の窯と同種の窯がこの地にあったものかさらに考察が加えられ、解明されるものと思いますが、先人が残した貴重な文化遺産を保護し継承していくことは、現代に生きるわたくしたちの責務と考え、今後、これらの出土した遺物を展示・活用し、先人の生活をしおび、あわせて文化財保護の精神を高揚してまいりたいと思います。

発掘調査に際し、御協力を賜った調査担当者の佐藤正人氏をはじめ、多くの方々の協力や助言、指導に対し厚く謝意を表するとともに、本書が市民をはじめ多くの方々に活用されるよう願ってやみません。

昭和59年3月

石巻市教育委員会

教育長 木 村 徳一郎

## 目 次

I.	発掘に至る経過	3
II.	環境と立地	4
III.	発見された遺構と遺物	6
1.	第4号窯跡	6
2.	第3号窯跡	13
3.	第5号窯跡	21
4.	第2号窯跡	25
5.	第8号窯跡	28
6.	第1号窯跡	28
7.	第6号窯跡	29
8.	第7号窯跡	29
IV.	まとめと考察	31

## 例 言

1. 本書は、国庫補助を得て行った水沼窯跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡所在地 宮城県石巻市水沼字寺中畠
3. 調査主体者 石巻市教育委員会
4. 調査期日 昭和58年8月5日～8月24日
5. 調査員 藤沼邦彦（宮城県教育庁文化財保護課）  
佐藤正人（尚絅女子学院短期大学）  
千葉孝弥（宮城県多賀城跡調査研究所補佐員）  
佐藤雄一（石巻高等学校）  
和田純大・中村光一（石巻市教育委員会）
6. 調査参加者 丹羽茂・阿部恵・茂木好光、（宮城県教育庁文化財保護課）、小井川和夫（東北歴史料館）、佐藤則之（宮城県多賀城跡調査研究所）、田中則和（仙台市教育委員会）、山田しょう・森嶋秀一（東北大考古学研究室）、鈴木真一郎（東北大地理学教室）、佐藤隆志・石黒伸一郎・相沢丈子・岩瀬暎治・庄司敦
7. 調査協力機関 宮城県教育庁文化財保護課・宮城県多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館
8. 調査協力者（作業員） 日下良一・馬場良治・三浦秀洋・千葉 功・高橋和浩・佐藤高浩、

### 馬場信義

9. 整理参加者 佐藤正人、千葉孝弥、その他後藤秀一、伊藤康子両氏の協力を得た。
10. 本書の執筆・編集は藤沼邦彦・佐藤正人・千葉孝弥・和田純夫がおこなった。

## I 発掘に至る経過

昭和56年6月、石巻市水沼字寺前にある三浦次郎氏宅の裏山において、雑木林を畠に切り開くための土取工事がおこなわれた。その際、焼土と共に多くの陶片やゆがんだ壺が出土したことから、三浦氏は、陶器を焼いた窯跡ではないかと考え、調査員の1人となる石巻市在住の中村光一に連絡した。中村は、散乱した陶片を採集する一方、東北歴史資料館藤沼邦彦、宮城県教育庁文化財保護課小井川和夫、佐藤正人に連絡を取り、昭和56年8月確認調査をおこなった。三浦氏は「発見当時崖面に窯跡の断面が7ヶ所にみられた」というが、その時には、地表面が乾燥していて窯体断面を正確にたどることはできなかった。その後、藤沼は、千葉孝弥・佐藤隆志と再度確認調査をおこない、地下式窑窓であり、その中に分煙柱をもつものが含まれていることを確認し、その数は5基であると推定した。また、採集されていた陶片の中に、これまで温美窯の特産品と考えられていた「袈裟揷文」を描いたものが含まれていたことに着目し、本窯跡の年代は12世紀に属し、直接温美半島から工人がやってきて焼成されたもので、その背景に平泉藤原氏の存在を考えた。なお、この間、名古屋大学の柄崎彰一教授、並びに東北学院大学伊東信雄教授が現地を視察され色々ご教授を受けた。石巻市教育委員会は、東北歴史資料館、県教育庁文化財保護課より本遺跡の性格について連絡を受け、佐藤雄一を委員長とする同市文化財保護委員会に今後の対応について諮詢した。市文化財保護委員会は、本遺跡を重視する一方、雨のたびに荒れしていく本遺跡を現状のまま保存することは困難であると判断し、学術発掘を実施する旨を昭和57年度に答申した。同委員会は、その答中に従い地権者である三浦次郎氏の承諾を得て、発掘調査に必要な国庫補助の申請をおこなった。昭和58年4月に国庫補助の内示を受け、発掘調査の準備に取りかかり、8月5日より調査を開始した。

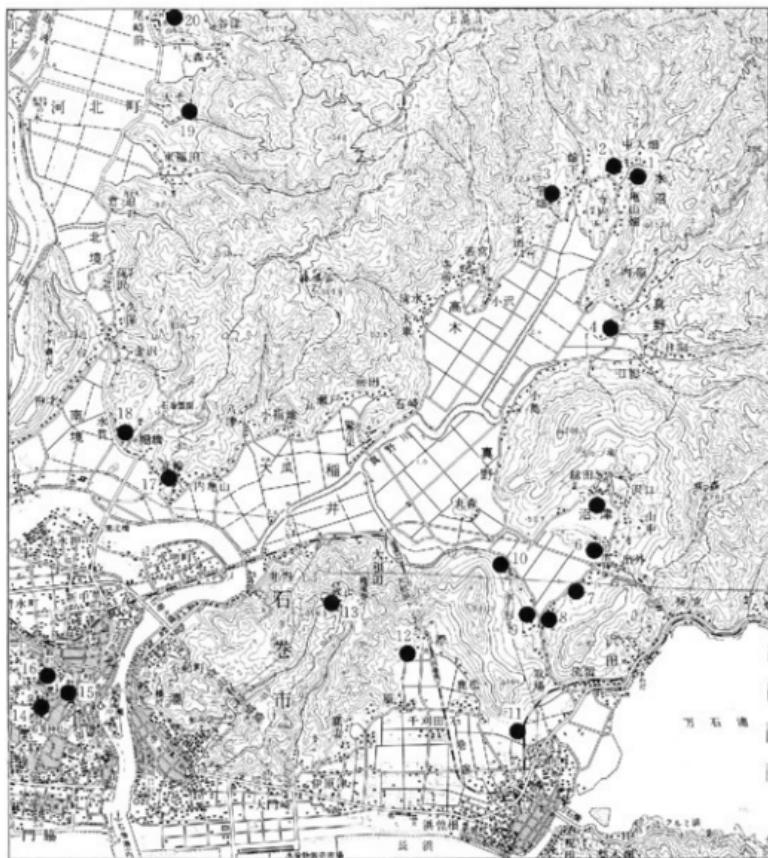
調査の範囲は、土取工事の摩崖跡を確認した区域320m<sup>2</sup>とし、土取工事のおこなわれていない区域は調査の対象としなかった。

## II 環境と立地

水沼窯は石巻市水沼字寺中畠にある。この地区は石巻市の中心部から北東約9kmにあたり、昭和42年に石巻市に合併する前は牡鹿郡稻井町に、さらにその前は稻井村に属した。江戸時代は水沼村であった。この地方は安倍氏や平泉藤原氏に関する伝説が多く、前九年役の古戦場とか居館跡と伝えられるものが各地に多数のこされている。また、遺跡の南にある京ヶ森は安倍貢任が経文を埋めたところ、隣の真野地区にある長谷寺の觀音堂は藤原秀衡が義経のために勧請したものと伝えられている。こうした話は現在もなお語られているが、あくまでも伝承であって正確ではない。むしろ、この地域は鎌倉時代から南北朝時代にかけての板碑群が多数のこされている地域として知られている。窯跡のすぐ前も安楽寺跡と伝えられ、多数の中世板碑が立ちならんでいる。また、水沼窯より西300mほどのところにある伊去波夜和氣命神社は、「延喜式」神名帳にみられるものである。

地形をみると、水沼附近は三方（西・北・東）に籠峰山(347.5m)－上品山(467.8m)－京ヶ森(281m)と丘陵が連なる。前面（西南）には狭い水田地帯がひらけ、雄勝峠に水源をもつ真野川が西南にむかって流れ、まもなく北上川に合流する。水運の便にめぐまれた所といえよう。

水沼窯跡の位置は平野部のもっとも奥まった地点にあり、標高30m前後、南向きの斜面を利用して構築されている。すでに工事によって大きく削られ、窯跡の断面が露出し、灰原はすっかり失われている。地域の基盤は主に中生代三疊紀に形成された稻井層からなる。しかし、本窯跡が所在する水沼周辺は、北上川河口から古稻井溝の中軸を通り追波川にぬける水沼向斜と呼ばれる摺曲構造上にあり、中生代ジュラ紀の地層である橋浦層群荒砥層が基盤となっている。  
(文献2)  
荒砥層は、層理の発達した黒色頁岩で厚さは約400mあるといわれている。本窯跡が掘り込まれている地層は、この荒砥層の上にのる風化した泥岩とその粘土化した地層である。



- |                   |          |           |        |
|-------------------|----------|-----------|--------|
| 1. 水沼古墓跡          | 石津市水沼寺寺前 | 11. 垂水遺跡  | 流留字垂水  |
| 2. 安樂寺跡           | 水沼寺寺内    | 12. 煙貝塚   | 渡波字餘波山 |
| 3. 伊去波夜和氣命神社(式内社) | 水沼字与市    | 13. 雪羊崎神社 | 字牧山    |
| 4. 内原遺跡           | 真野字小山    | 14. 梅ヶ丘遺跡 | 泉町一丁目  |
| 5. 越田台遺跡          | 居津字越田    | 15. 永嚴寺貝塚 | 泉町一丁目  |
| 6. 渡津貝塚           | 居津字吉外    | 16. 羽黒山遺跡 | 羽瀬町一丁目 |
| 7. 碓田貝塚           | 沢田字磧山    | 17. 真轟山遺跡 | 福井大浜橋  |
| 8. 平形貝塚           | 沢田字平形    | 18. 水貫山遺跡 | 南淡字水貫山 |
| 9. 平駒山根貝塚         | 沢田字平駒山根  | 19. 大土遺跡  | 河北町字大土 |
| 10. 広見山貝塚         | 沢田字広見山   | 20. 尾崎前遺跡 | 字尾崎前   |

第1図 福井周辺の遺跡（主に平安時代の遺跡）

### III 発見された遺構と遺物

今回の調査では、先に確認すみの5基に、新たに確認した3基を加えた計8基の遺構があきらかになった。8基の窯跡は、南北に延びた丘陵の南先端から西側斜面ぞいに、北に向けて徐々に位置を高くして配置されている。窯跡には、便宜的に南から順に1号から8号までの名称をつけた。

8基の窯跡は、陶器を出土した第3号窯跡・4号窯跡・5号窯跡と陶器を出土していない第1号窯跡・2号窯跡・6号窯跡・7号窯跡・8号窯跡とに分けられる。これらは窯体構造も異なるものである。

説明にあたってはこれらを分けて記述することにした。

陶器を出土した窯（陶器窯）の各部名称については、前方から分焰柱の中央までを燃焼室、分焰柱の中央からゆるやかに下降した後、再び勾配を登りつめ、床面の傾斜が段によって大きく変化する部分までを焼成室、さらに、その焼成室とくびれで接し、ゆるやかな勾配で棒状の形をした部分を煙道とした。

また、陶器を出土していない遺構についても、構造は異なるが陶器窯と同じ名称を使用し、平坦で最も広い部分を焼成室、その焼成室奥壁に突き出た部分を煙道とし、煙道の左右にある一対の円形をした部分をそれぞれ左副室、右副室とした。

#### 1. 第4号窯跡

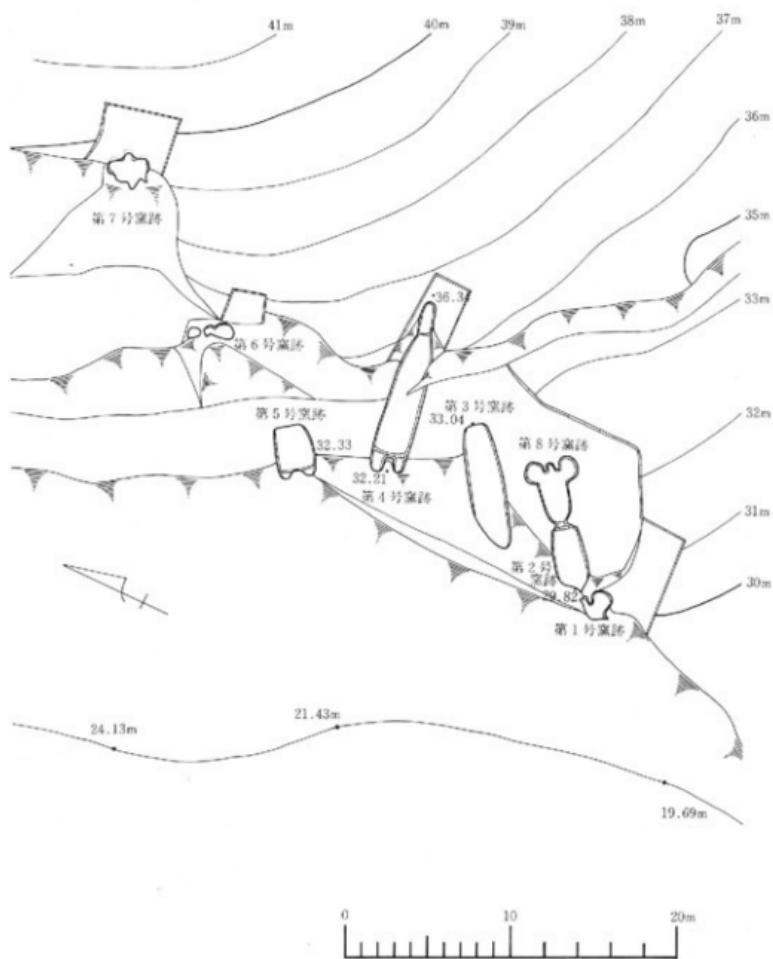
##### (1) 遺構（第3図、図版5・6）

第4号窯跡は、床・側壁に強い火熱を受けた痕跡がみられ、また、陶器が焼台とともに出土しており、陶器窯と確認されたものである。その構造は、斜面をトンネル状に掘り込んだもので地下式窯窯である。残存状態は今回調査したものの中では最も良好であるが、焚口・燃焼室は削り取られて既にななく、分焰柱の一部をも失っていた。また、天井部は全て崩落していた。現存する窯の長さは、水平距離で10.9m、傾斜している床面の斜距離で11.62m、窯幅は最大の部分で2.0mである。中軸線の方向は、北で89°東へ偏している。

##### （分焰柱と通焰孔）

分焰柱は、地山を削り出して作られており床面から約50cmの高さまで残存していた。基部の平面形は、窯体中軸線の方向に長い隅丸長方形である。幅は70cm、長さについては不明である。分焰柱の立ち上りは、ゆるやかであるが、焼成室側は通焰孔側に比べてより大きく内側している。

2つの通焰孔は天井部崩落のため高さは不明であるが、幅は75cmとほぼ同じ大きさである。



第2図 水沼窓跡地形図

この通焰孔や分焰柱周辺の床面上には、灰や炭からなる層が2cmほどの厚さで堆積していた。床面は焼成室に向けて12°傾斜している。

#### (焼成室)

焼成室は、分焰柱のほぼ中央より水平距離4mまで、ほぼ一定した幅を保っているが、それ以降は徐々に幅を狭めながら煙道へと続いている。焼成室の全長は水平距離で7.8mある。床は煙道に向って強く傾斜しており、実質的な床面の長さ（斜距離）は約8.5mとなる。最大幅は、分焰柱の基底部より2m煙道よりにいった部分で約2m、最も狭いところは煙道と接する部分で約1mである。床面は分焰柱付近まで燃焼室からの傾斜角がそのまま続き、分焰柱先端で約6cmのかかる段を形成する。そして、その段から30cm煙道方向にいった部分が焼成室の最も低いところとなっており、確認面からの深さは90cmである。その後約30°の急斜面を形成する。煙道部と接する付近では、急に幅が狭まり煙道の境に高さ20cmの段が形成されている。

床面は、平坦であるが、焼成室ほぼ中央の北側壁ぎわと煙道部付近の南側壁ぎわに各2つの東西に並んだ浅いくぼみが検出された。前者は直径20cmと40cmであり、後者は直径20cmである。側壁は床面から直立ぎみに内溝しながら立ち上る。壁の残存高は、焼成室の急傾斜がはじまる右側壁で最も高く約90cmである。最も低いのは煙道と接する部分で約10cmである。

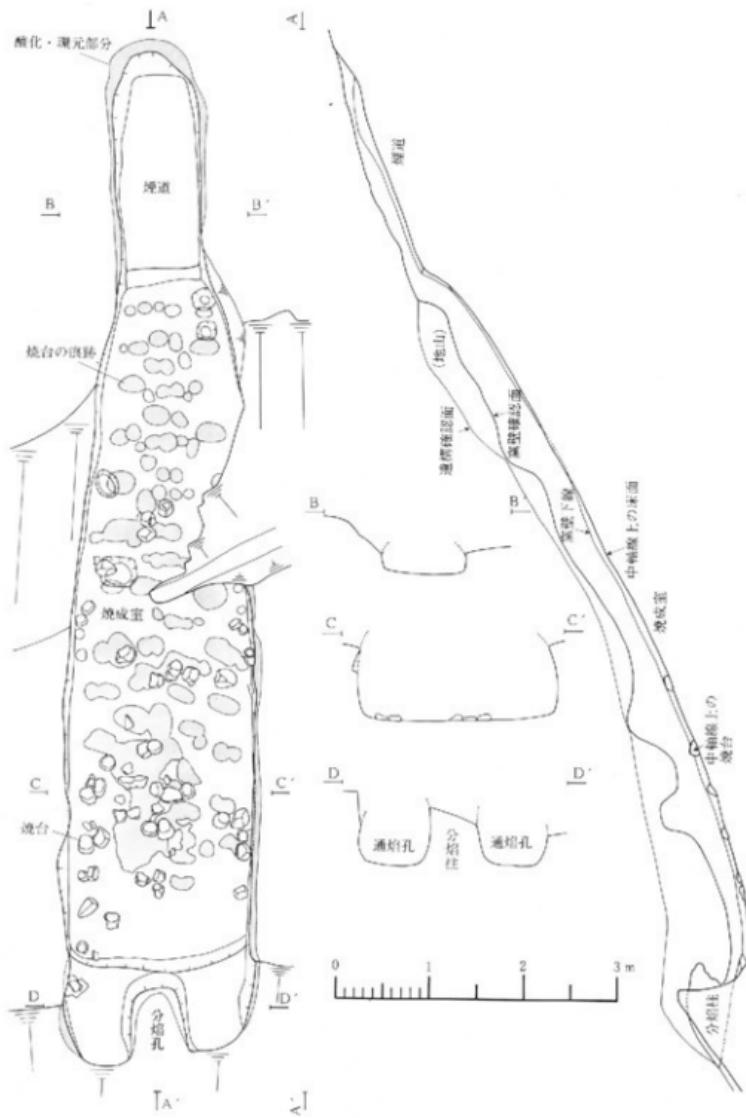
#### (焼成室内における遺構と遺物の出土状況)

焼成室床面には多数の焼台とその痕跡がみられた。本窯跡の最終焼成時の焼台の跡とみられる。それらの状況から当時の焼台の配置を推察することができる。焼台は、床面の傾斜が急になる部分から、煙道部の境まで配置されている。そして、焼成室でも燃焼室に近い方には比較的大型の焼台が置かれている反面、煙道に近い方には小型の焼台が多く置かれているという状況がみられる。焼台には、直径約10cmの小型のものと、約30cmの大型のものとがあり、また、それぞれ単独で存在するものと2個が組みになっているものとがある。なお、陶器片を附着させたものもある（第13図）。

出土した陶器には、甕、壺、壜体、瓶、羽釜がある。その多くは、二次焼成されており、焼台として利用されていた可能性が大きい。

#### (煙道)

焼成室から煙道へは窓幅のくびれと床面傾斜角の変換によって移行する。煙道の平面形は長方形で、規模は長さ2.4m、幅は0.9mである。床面の傾斜は、焼成室に近い方では18°であるが、先端部では更にゆるくなり約10°とほぼ平坦である。床面及び壁は酸化作用で赤色に変化していたが、焼け縮まってはいない。側壁は床面から外傾ぎみに内溝する。残存高はわずかに15cmである。障壁（ダンパー）等の施設は全く検出されなかった。



第3図 第4号索跡平面図

## (2) 出土遺物

### ①壺（第4図、図版9）

頸部が直立ぎみに立ち上がり、体部との境が明瞭なものを壺とする（以下これに準ずる）。

口縁部の破片が8点出土しているが、器形・胎土などの類似から3個体分と思われる。

壺1 頸部が直立氣味に立ち上がり、口縁部が下方に軽く折れ曲がっている。接合しないが同一個体と思われる口縁部から体部にかけての壺んだ破片がある。口径は約17cmである。

（調整）口縁部は内外とも丁寧にヨコナデ調整している。体部についてみると、内面はヨコナデ調整しているがあまり丁寧ではない。外面は自然釉のため不明である。

（色調）外面と内面口縁部は青黒色、内面体部は暗青灰色を呈す。外面体部及び口縁部には紫黒色～淡黒色～淡黄色の自然釉がかかっている。

（胎土）白色粒を含み灰赤色を呈す。

（その他）二次焼成を受けている。

壺2 口縁部を鋭く下方へ折り曲げている。

（調整）内外とも丁寧なヨコナデ調整をしている。

（色調）内外とも灰色を呈し、内面には淡黄色の自然釉がみられる。

（胎土）白色粒を含み灰色を呈す。

（その他）二次焼成を受けている。

小片のため図示できなかったが短頸壺が1個体分出土している。出土したのは口縁部の破片であり、焼け歪んでいるため器高口径に関しては不明であるが、頸部の高さは約3cmである。内外ともヨコナデ調整されており、端部は若干肥厚して丸く仕上げられている。胎土は白色粒を含む灰赤色である。内面は灰色であるが外面には黒色～淡黄色の自然釉が厚くかかっている。

### ②甕（第4図、図版9）

頸部が短く外反するものを甕とする（以下これに準ずる）。

口縁部破片1点、底部破片2点が出土した。

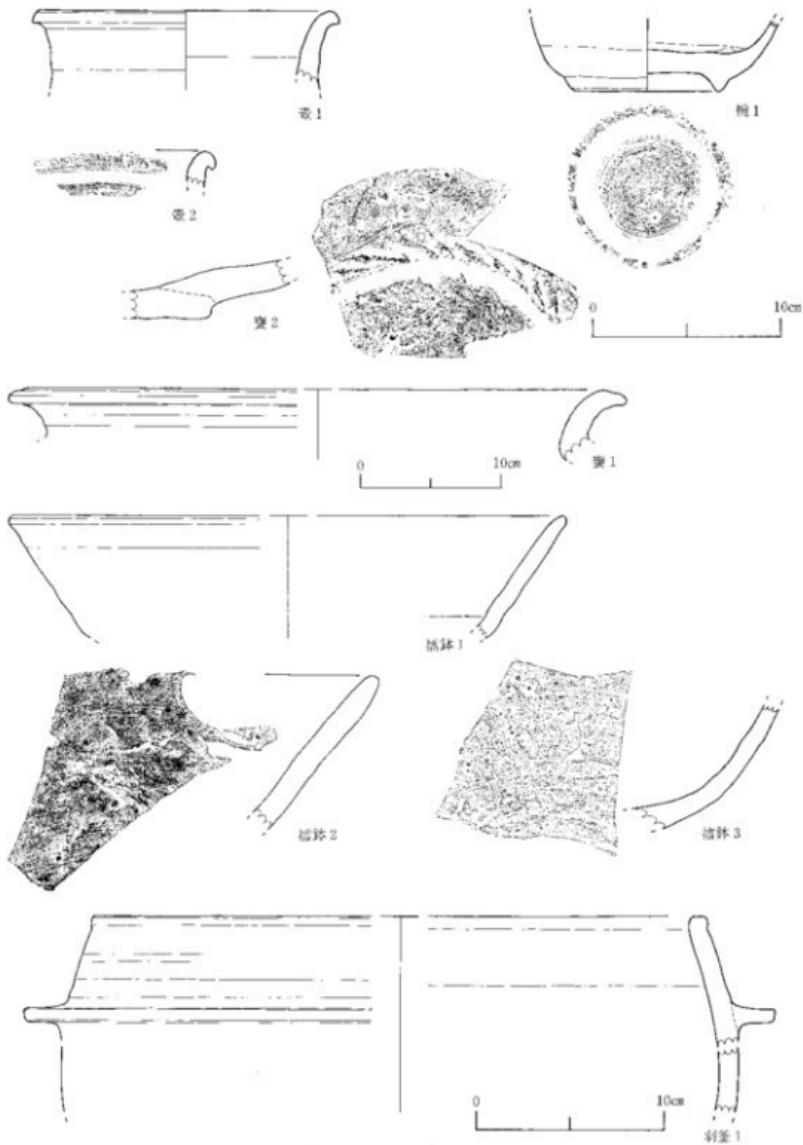
甕1 頸部は短くゆるやかに外反し、外側に水平に引き出して端部を丸く仕上げている。水平に引き出されたところの上面には浅い沈線が走るが明瞭でない。頸部と体部の境は明確になるようである。口径は約44cmである。

（調整）内外ともヨコナデ調整されている。

（色調）内外とも暗青灰色を呈す。外面頸部の付け際や内面の一部に淡黄色の自然釉がかかっている。

（胎土）白色粒を含み暗青色を呈す。

（その他）二次焼成されている。



第4図 第4号出土品

### ③擂鉢（第4図）

口縁部破片3点、体部破片1点が出土した。口縁部破片は細部で異なることから別個体と思われる。

擂鉢1・2 体部はほぼ直線的に立ち上がり外傾する。口縁部はいずれも丸く仕上げられている。口径は擂鉢1でみると約30cmである。

（調整）内外とも丁寧にヨコナデ調整している

（色調）擂鉢1は内面が暗青灰色で淡黄色の自然釉がみられ、外面は灰赤色を呈す。擂鉢2は内外とも灰赤色～暗青灰色を呈す。

（胎土）白色粒を含み暗青灰色を呈す。

（その他）二次焼成されている。

擂鉢3 体部破片である。

（調整）内外とも丁寧にヨコナデ調整されており、外面はその後下半に横位のヘラケズリがみられる。

（色調）内面は一部灰赤色を呈すが全体的に暗青灰色を呈し、外面は灰赤色を呈す。

（胎土）白色粒を含み暗青灰色を呈す。

（その他）二次焼成されている。

### ④椀（第4図、図版10）

1個体出土している。

椀1 口縁部を欠いているが体部は丸味を持って立ち上がっている。貼り付けによる高台をしている。

（調整）内外ともヨコナデ調整している。高台貼付後もその接合部をヨコナデしている。

（色調）灰赤色であるが、見込みと高台内は青灰色を呈す。

（胎土）白色粒を含み、青灰色を呈す。

（その他）焼成時に直接重ね焼したとみて見込みにその痕跡が残っている。二次焼成を受けている。

### ⑤羽釜（第4図、図版10）

1個体分の破片が出土している。口径約33cmである。

羽釜1

（調整）外面は上半はヨコナデ調整している。下半はヘラナデ調整しているがその痕跡は明瞭でない。底部の近くは部分的に横方向にヘラケズリしている。内面は上半を丁寧にヨコナデ調整している。下半は方向がやや不揃いのヨコナデ調整されている。また内外面に布の圧痕が見られ調整に用いたものと思われる。

(色調) 各部分によって著しく異なるが、赤褐色・緑灰色・青灰色を呈する。

(胎土) 砂を非常に多く含み、赤褐色・にぶい赤褐色・緑灰色を呈す。

(その他) 個々の破片が二次焼成によって著しく焼け歪んでいる。

## 2. 第3号窯跡

### (1) 遺構 (第5図、図版4・5)

第3号窯跡は、床、側壁に強い火熱を受けた痕跡がみられ、また、陶器が焼台とともに出土しており、陶器窯と確認されたものである。構造は第4号窯跡と同じく地下式窯窓である。残存状況は、焼成室の一部を残すのみである。天井部も全て崩落していたが、残存する床や側壁などの状況は良好であった。中軸線の方向は、北で62° 東へ偏している。

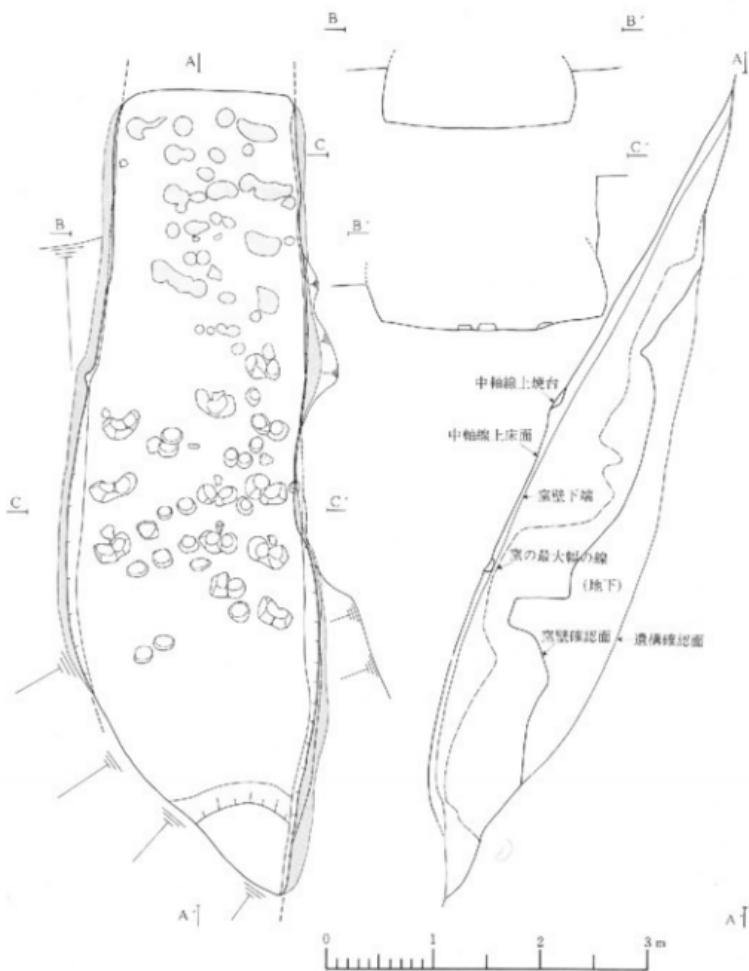
#### (焼成室)

焼成室は水平距離で7.5m、斜距離で8.2m 残存していた。焼成室の平面形は、焚口方向より徐々に幅を広げ、ほぼ中央部の最も低くなつたところで2.2mとなり、最大幅となつてゐる。そして、次第に幅を狭め残存する窯体の最端部で1.6mとなる。床面は、焚口方向から傾斜角10° でわずかに下降したのち約10cmの段を形成し、その段から30cm焼道方向にいた部分が焼成室の最も低いところとなつてゐる。確認面からの深さは1mである。そのち約30°の急斜面を形成する。床面は、中央部がやや低く、側壁は、その床面から内傾ぎみに内漏しながら立ち上る。壁面には窯体掘削時の工具痕が残っていた。

#### (焼成室における遺物の出土状況)

焼成室床面には、31個の焼台とその痕跡がみられた。配置方法は、大型の焼台を左右の壁ぎわに、中型の焼台を2個組みにして、その内側に配している。そして大型・中型の焼台の間に、小型の焼台を不規則においている。大型の焼台は直徑20cm~40cm、中型のものは15cm~20cm、小型のものは10cmの円形をしている。

出土した陶器には、甕、壺、桶鉢がある。これらは最終焼成後何らかの理由で窯内に取り残されたものと、焼台に使用されていたものとに分けることができる。前者としては、窯体が最大となる中央部のほぼ中心から、小型の焼台にのつて小型の壺一点が完全な形で出土した。また、中央部の右側壁寄りから前方部（削り取られた面まで）右側壁寄りの4mの範囲にかけて袈裟縞文を配した壺の破片が2個体分出土した。かつて採集されていた袈裟縞文の入った壺破片は、その一部であった。また、後者の陶片には、床面にはりついで出土したものと、焼台に付着して出土したものとがあり、二次焼成されていた。



第5図 第3号里程碑跡平面図など

## [2] 出土遺物

### ①壺（第6～8図、図版8・9）

規格の異なる三種類のものが出土している。この内、大型のものが二個体あるが、器形・装飾などで非常に類似している。小型のものは完形器1点と口縁部破片4点が出土した。また、前二者に対して中型のものがあり、口縁部破片が2点出土している。

壺1・2 頭部が直立し、口縁部が下方へ折り曲げられている。肩部は丸味を持ち、最大径は体部でもかなり上方へくると推定される。口径は約23cm、体部最大径は約42cmとほぼ同規格である。いずれも底部を欠くが、器高は52cmほどであろう。

（調整）外面は口縁部から頭部にかけてヨコナデ調整がみられる。肩部より下の部分にはたて方向のヘラケズリがみられるが、その単位はあまり明瞭でない。体部上半から下半にかけての屈曲部ではヘラで強く撫でつけたような痕跡が一層しているのが目立つが、上半部と下半部とを別々に作り、のちに接合した際の痕跡と考えられる。内面をみると口縁部はヨコナデ調整されており、頭部から肩部へ移行する部分には指でおさえた痕跡やヘラでナデた痕跡などがみられ、それより下の部分は、横方向の粗いナデツケ調整がみられる。なお、壺1は体部下方を叩き成形している。

（色調）内面はにびい赤褐色～暗赤灰色である。外面もにびい赤褐色～暗赤灰色を呈するが黒褐色を呈するところもあり、暗オリーブ～オリーブ黒色の自然釉がかかっている。

（胎土）白色粒を含み、にびい赤褐色を呈す。割れ目はやや滑らかである。

（装飾）半截竹管により、体部に袈裟襷文を描いている。横位の三筋線は頭部・肩部・そして体部上半から下半へかけての屈曲部に施されており縦線は4単位である。また、肩部には縦耳が付けられているが、壺1では三つの耳が残っており、その配置から四耳壺であることがわかる。耳はヘラで面取りされており、円形の孔が貫通している。耳は袈裟襷文を描いた後で貼付されたものである。なお、袈裟襷文の三筋線を描くにあたっては回転力を用いたと思われ、施文具が器体を一層した後重複している部分がある。

壺3・4 頭部が直立し、口縁部が下方へ折り曲げられている。壺3でみると口径は約15cmである。

（調整）内外ともヨコナデ調整している。壺3はその後、内面をやや斜め上方にナデ上げている。

（色調）内外とも灰色を呈す。壺3は外面と内面の上位に、壺4は内面にオリーブ黒色の自然釉がかかっている。

（胎土）白色粒を含み、器面に近い方は灰黄色、内面はにびい赤褐色を呈す。またその中間は薄く青黒色となっている。

壺 5・6・7 頭部は直線的に外傾し、肩部との境は明瞭である。口縁部は下方に折り曲げられている。肩部はナデ肩で丸味を持ち、最大径となっている。そこから次第に細くなって底部に至っている。底部は所謂鉢底状を呈し、若干凹凸がある。壺 5 みると口径11cm、高さ25.5cmである。

(調整) 外面は口縁部から体部下半まで丁寧にヨコナデ調整している。下半は横方向にヘラケズリしているが、その上をさらにヨコナデ調整しているためあまり明瞭ではない。上半は全体にシャープな凹凸が観察され、特に頭部は薄く挽き出している。

(色調) 背黒色～暗緑灰色を呈す。肩部にオリーブ黒色の自然釉がかかる。

(胎土) 白色粒を含み、器面に近いところは暗青灰色を呈し、内面は灰赤色を呈す。

### ②甕 (第8図、図版9)

口縁部破片が2点出土した。いずれも小破片のため、この器種の全体の器形を知ることはできない。

甕 1 頭部が直立気味に立ち上がってのち外反し、端部がやや屈曲する。口径は約39cmである。

(調整) 内外面ともヨコナデ調整されている。特に外面はその際に生じた凹凸が顕著で回転力を用いていると思われる。内面には連續しない単位の短いナデも見られる。外面の頭部と肩部の継ぎ目には粘土紐の巻き上げ痕が残っている。

(色調) 内外とも暗青灰色を呈すが、二次焼成を受けてにぶい赤褐色を呈するところもある。

(胎土) 白色粒を若干含み暗青灰色を呈す。

(その他) 二次焼成を受けている。

甕 2 体部の破片のため甕である可能性もある。体部の中位から下位へ移行する部分の破片と思われる。外面には格子の叩き文様が全面に残っている。

(調整) 外面はたて方向にヘラケズリされており、内面はヨコナデ調整されている。

(色調) 外面はにぶい赤褐色や暗赤灰色で内面はにぶい赤褐色を呈す。外面には黒褐色の自然釉がかかっている。

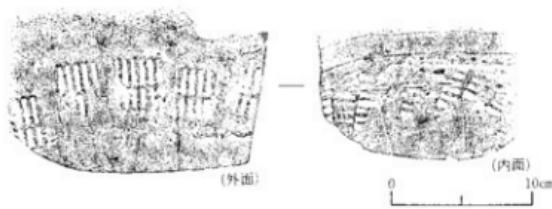
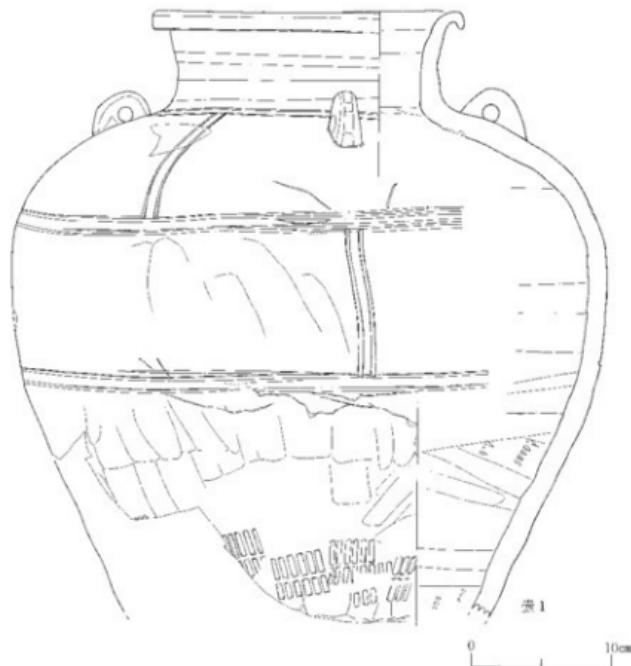
(胎土) 白色粒を含み、にぶい赤褐色を呈す。割れ口はやや滑らかである。

### ③擂鉢 (第9図)

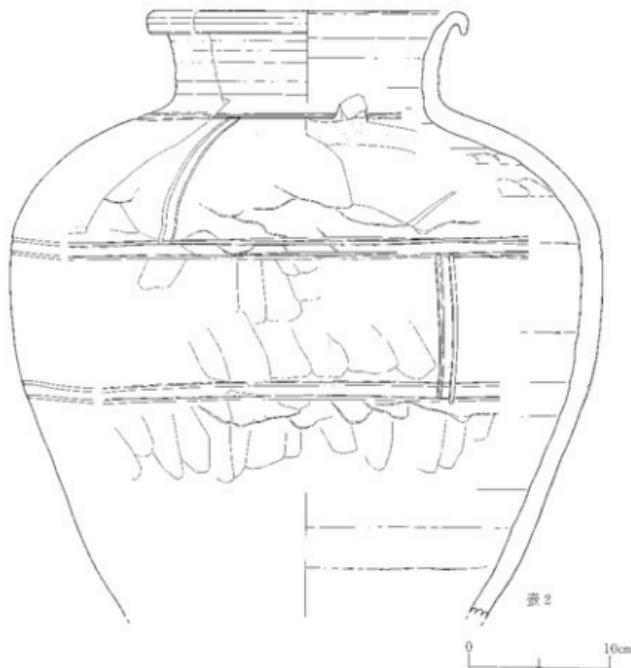
口縁部破片5点、体部破片4点、底部破片1点が出上した。口縁部破片は端部の作りなど細部で異なることや胎土の相違などから別個体と思われる。口径は擂鉢 1 が約32cmである。

擂鉢 1・2・3・4 いずれも内湾気味に立ち上がる器形である。擂鉢 3 は口縁端部を短く外反させているが、その他は先端をそのまま丸く仕上げている。

(調整) 内外ともヨコナデ調整している。擂鉢 4 には体部下方に横方向のヘラケズリがみられる。



第6図 第3号窯出土品



第7図 第3号窯出土品

(色調) 内外とも灰赤色であるが部分的に灰色を呈するところもある。淡黄色の自然釉がかっている破片もある。

(胎土) 白色粒を含み、暗青灰色を呈す。

(その他) いずれも二次焼成されている。

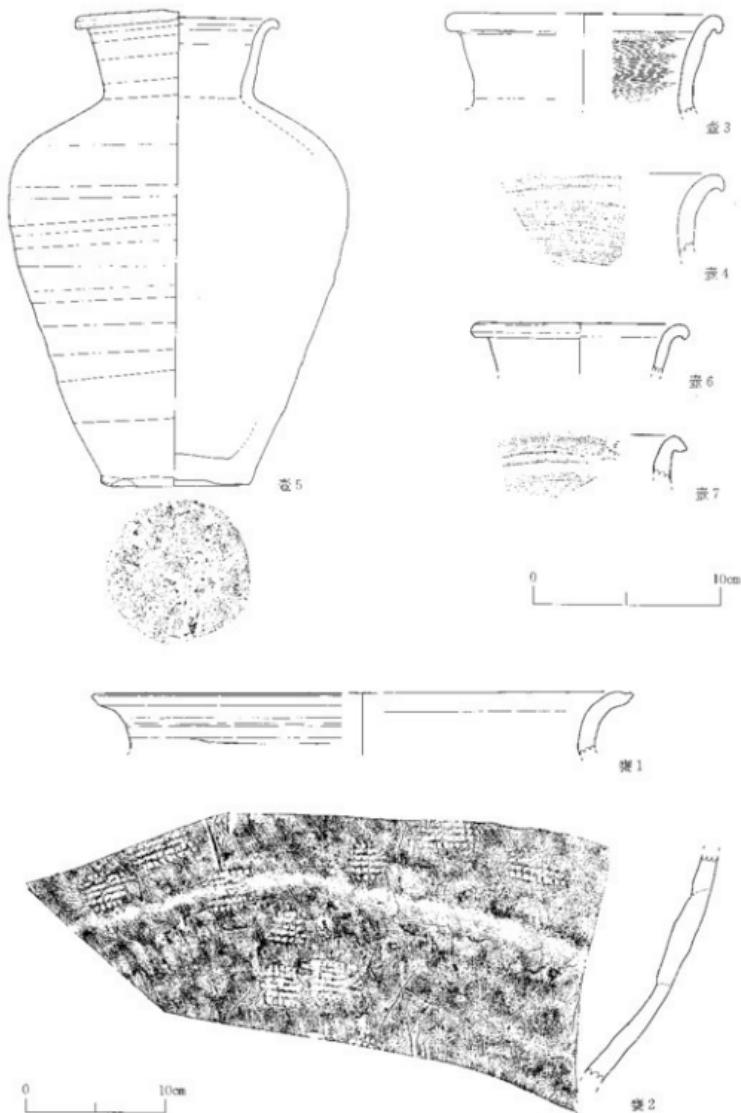
插録5 底部破片である。外面に残されたわずかの高まりから高台の付いていたことが知れる。

(調整) 内面は見込みに沿ってナデ調整している。外面は明瞭な痕跡をとらえ難いが、高台貼付後、その内側をナデ調整している。

(色調) 内面は青灰色、外面は暗青灰色を呈す。

(胎土) 白色粒を含み、暗青灰色を呈す。

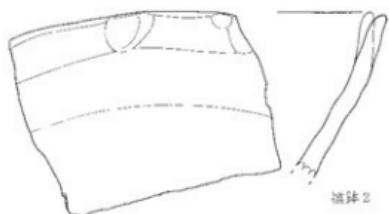
(その他) 見込みに焼成時の重ね焼きの痕跡がみられる。二次焼成されている。



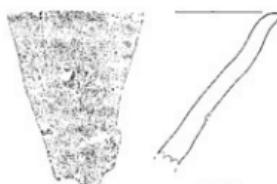
第8図 第3号窯出土品



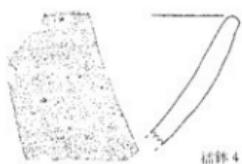
插鉢 1



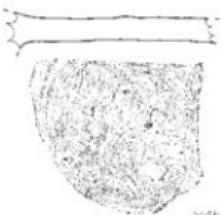
插鉢 2



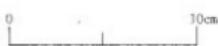
插鉢 3



插鉢 4



插鉢 5



第9図 第3号窯出土品

### 3. 第5号窯跡

#### (1) 造構 (第10図、図版7)

第5号窯跡は、床、側壁に強い火熱を受けた痕跡がみられ、また、陶器が焼台とともに出土しており、陶器窯と確認されたものである。窯体は、焼成室の一部を残し全て削り取られているため、窯体構造の詳細はわからない。天井部は全て崩落しており、残存する床・壁の状況は極めて悪い。中軸線の方向は、北で67°東へ偏している。

##### (焼成室)

残存する焼成室の規模は、水平距離で長さ2.8m、傾斜している床面の斜距離で3.0mあり、最大幅は2.2mである。床面は、最大幅になる部分から煙道の方向へむけて急斜面になり、その傾斜角は24°である。側壁は床面から直立ぎみに内湾しながら立ち上る。残存高は、最大幅となる部分で最も高く約50cmである。

##### (焼成室における遺物の出土状況)

焼成室床面には焼台とその痕跡がみられた。焼台には、直径20cmの橢円形状のものと、直径約10cmの円形のものがある。しかし、床面が全体的に荒れており、焼台配置の規則性を求めるることはできない。また、床面から15点の陶片が出土した。それらは、壺、甕、擂鉢の3種で床面に貼り付いた状態で出土している。これらはいずれも二次焼成されており、焼台として使用されたものと思われる。

#### (2) 出土遺物

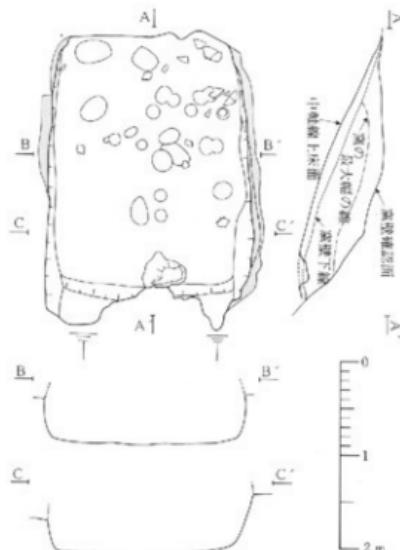
##### ①壺 (第11図)

口縁部破片が2点出土した。直接接合しないが器形・胎土・色調が類似することにより同一個体と思われる。

壺1 頸部が直立し、口縁部は外側へわずかに引き出して先端を丸くおさめている。口径は約11cmである。

(調整) 口縁～頸部は内外ともヨコナデ調整されている。外面は比較的丁寧で回転力を用いていると思われる。内面は口縁部の近くに粘土紐の巻き上げ痕が残っている。

(色調) 内外とも暗赤褐色を呈し光沢がある。さらに外面にはオリーブ黒色の自然釉が厚く



第10図 第5号窯跡平面図など

かかっている。

(胎土) 砂を多く含み暗青灰色を呈す。

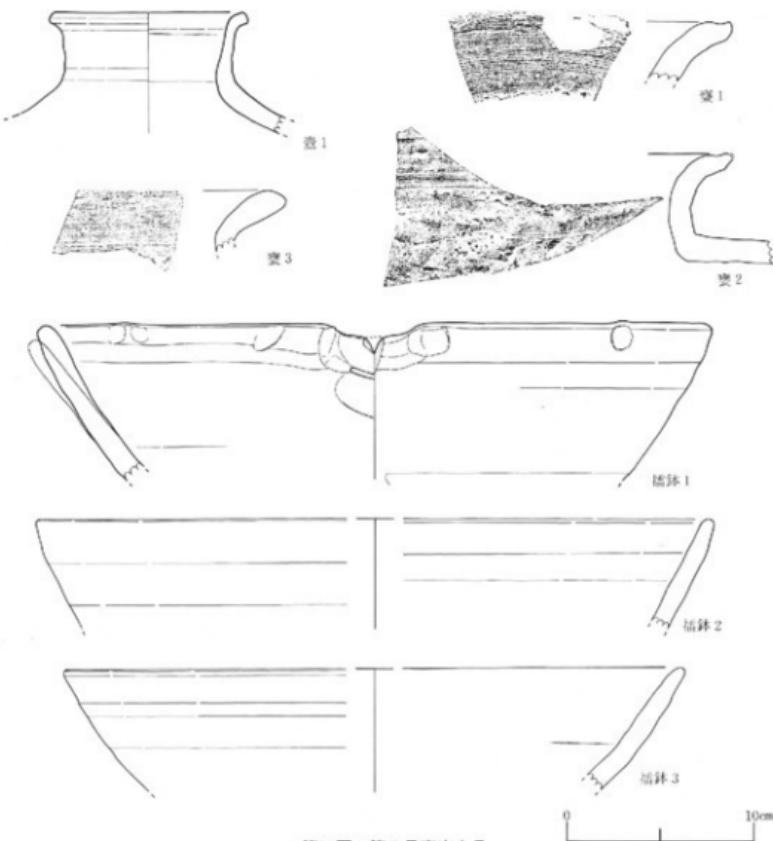
(その他) 二次焼成されており器面が荒れている。

②甕 (第11図、図版11)

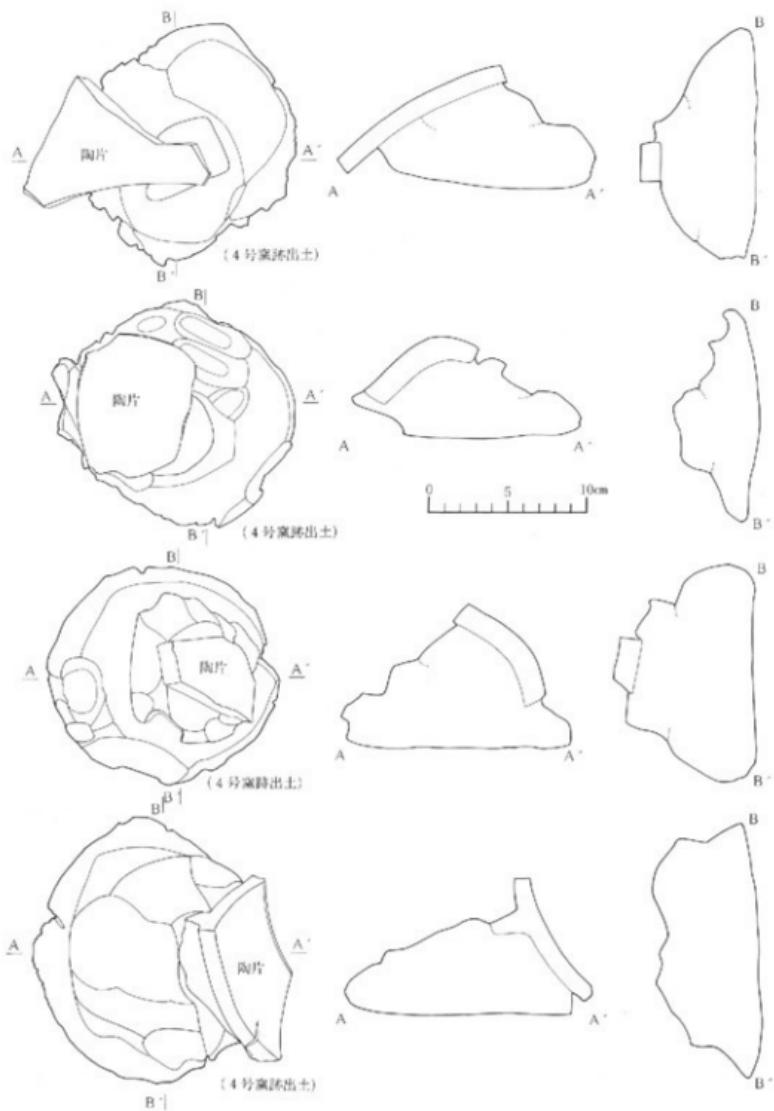
口縁部破片が4点出土した。細部で器形が異なるところからすべて別個体と思われる。

甕1・2 頸部がわずかに直立してから外反し、先端が屈曲するものである。

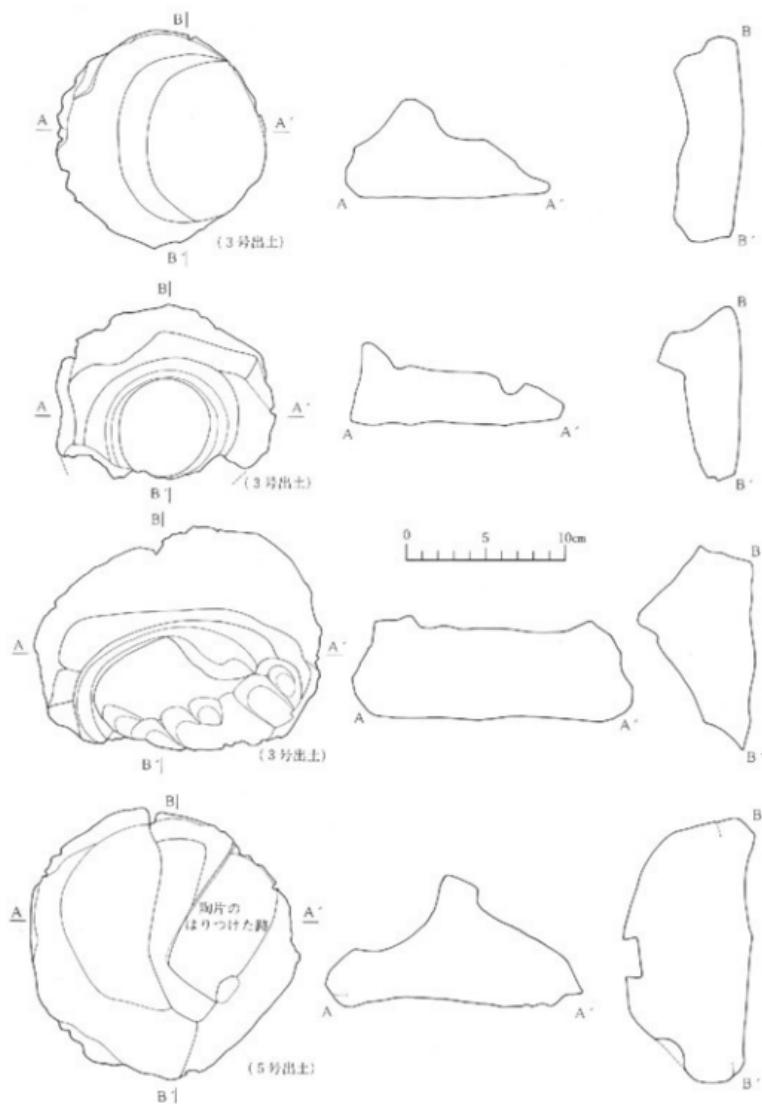
(調整) 口頸部は内外とも丁寧にヨコナデ調整している。肩部との接合部分についてみると内面は指でおさえたのち荒くヨコナデしており、外面はヘラ状工具で荒くナデつけたのちヨコ



第11図 第5号窯出土品



第12図 粘土製焼台



第13図 粘土製焼台

ナデしている。

(色調) 外面及び内面の口縁部は青黒色で光沢があり、光沢のない部分では灰色を呈す。内面体部は黒褐色を呈す。オリーブ色のザラザラした自然釉が附着しているものがある。

(胎土) 白色粒を含む。器面に近い部分は暗青灰色、内面は暗紫灰色を呈す。割れ口はやや滑らかである。

甕3 口縁部がやや肥厚し、上端を平坦に、先端を丸く仕上げたものである。小破片のため、全体の器形は明らかでない。

調整、色調、胎土は甕1・2と同様である。

#### ③擂鉢 (第11図、図版11)

口縁部破片が6点、体部破片が1点出土した。器形・焼成・胎土の類似から5個体分と考えられる。片口の付いているものが1点あるが、基本的にはそれ一つ或は複数の片口を有する器形であったと思われる。

擂鉢1・2・3 いずれも口縁から体部上半のみの破片のため全体の器形については不明である。体部は若干内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸く仕上げている。口径は擂鉢1・2が約36cm、擂鉢3が約33cmである。

(調整) いずれも内外丁寧にヨコナデ調整している。回転力を用いているようである。

(色調) 内外とも褐灰色を呈するもの、外面は褐色で内面は暗褐色を呈するものがある。

(胎土) 擂鉢2・3は砂粒を多く含むやや荒い土で、器面に近い部分は暗青灰色、内面が灰赤色を呈す。擂鉢1は砂粒を若干含むが比較的緻密で暗青灰色を呈する。

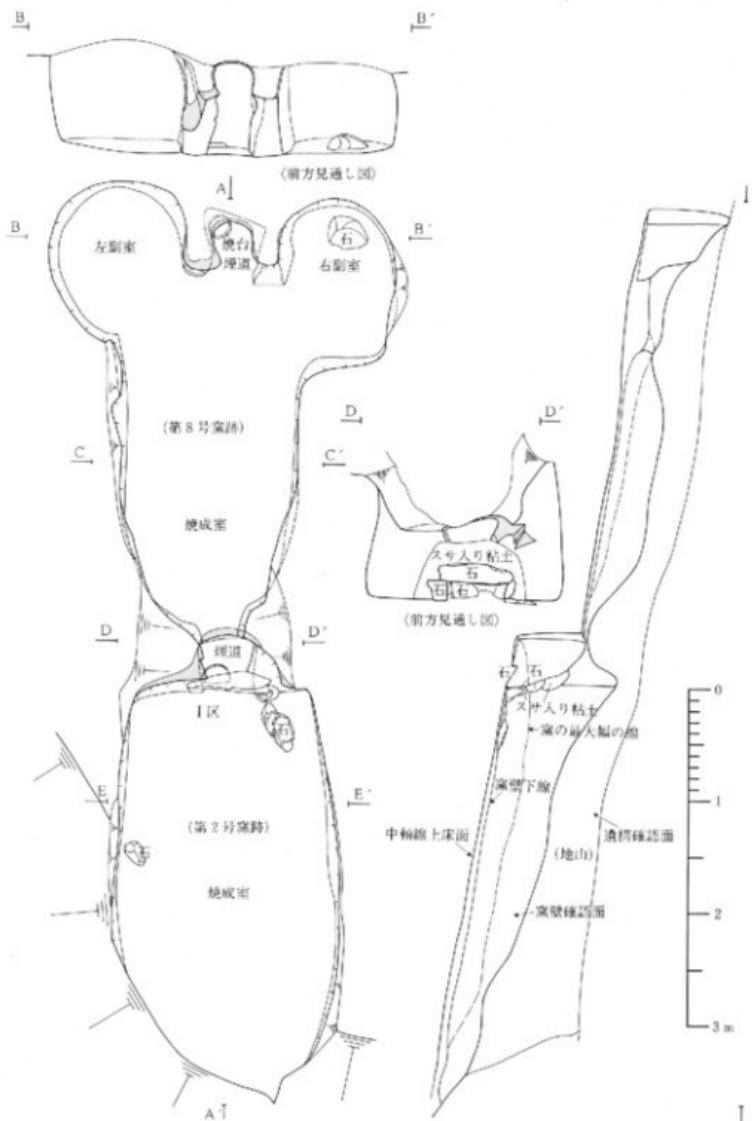
(その他) 擂鉢1の口縁部に一ヶ所輪花の痕跡が見られた。外面に親指、内側に人指し指と中指とを当てて軽くつまむようにしてつくり出しているがあまり明瞭でない。破片のため全体でどのような配置になるのかは不明である。

## 4. 第2号窯跡 (第15図、図版3)

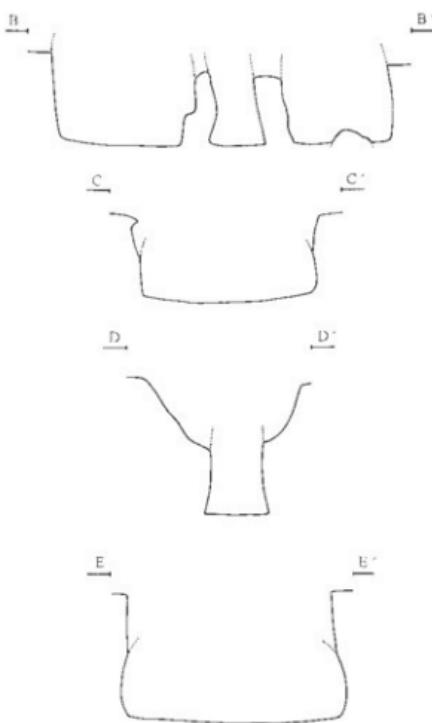
第2号窯跡は、床、側壁に強い火熱を受けた痕跡がみられ、環元の作用で灰黄褐色に変化し堅くしまっていた。残存する遺構は、長方形の焼成室とその奥壁中央先端に設けられた煙道からなる。その大きさは、水平距離で4.2m、床面の斜距離で4.3m、窯幅は最大の部分で2.0mである。中軸線の方向は、北で63°東へ偏している。なお、堆積層から甕の口縁部破片(第14図)が1点出土している。



第14図 第2号窯出土品



第15図 第2号・第8号窯跡平面図



第15図 第2号・第8号窯跡断面図

#### (焼成室)

焼成室は、前方部を削り取られ水平距離3.68m、斜距離で3.7m残存していた。残存部分の平面形は、前方部から中央部にかけて徐々に広がり最大幅2.0mとなる。それ以降は徐々に幅を狭め奥壁は幅1.5mである。その形状は胸張りの長方形である。床面は、煙道方向へ傾斜角10°でわずかに上りぎみになっており平坦である。また、床面には一面に2cmから3cmほどの灰や炭の堆積がみられ、その中には長さ約5cmの木炭もはいっていた。側壁は、その床面から外傾ぎみに内済しながら立ち上る。壁の残存高は、右奥壁で最も高く約1mである。壁面には窯体掘削時の工具痕が残っている。

#### (煙道)

煙道は、焼成室奥壁のほぼ中央から突き出た幅50cm、奥行50cmの方形状のもので、焼成室の

境にある障壁によって移行する。障壁は、煙道の入口となる焼成室奥壁手前に、高さ20cm幅12cmの一対の石を立て、その上に高さ20cm、幅70cmの粘板岩を貼り付ける形でのせている。そして、粘板岩の下に、高さ20cm、幅45cmの空間だけを残して周囲をスサ入りの粘土で補強し高く積み上げている。

壁は、やや内傾ぎみに立ち上る。残存高は60cmである。また、床・壁は、焼成室と同様環元状態で焼け縮っていた。

## 5. 第8号窯跡（第15図、図版4）

第8号窯跡は、側壁にわずかに火熱を受けた痕跡がみられ、酸化の作用で赤色に変化していたが焼け縮っていない。残存する遺構は、細長い焼成室とその先端左右に楕円形の一対の左右副室、そして、焼成室先端に張り出した煙道からなる。その大きさは、水平距離で4m、床面の斜距離で4.1m、窓幅は左右副室の部分で最大となり3.0mである。中軸線の方向は北で63°東へ偏しており、2号窯の中軸線と同軸上にある。

### （焼成室）

焼成室は、第2号窯跡煙道と接続する部分で幅40cmと狭く、煙道方向に進むにしたがって徐々に広がり、左右の副室とのコーナーにおいて最大幅1.6mとなる。水平距離で3.1m、斜距離で3.2mである。床面の傾斜は8°でほぼ平坦である。側壁は直立ぎみに内溝して立ち上る。残存する壁の高さは、ほぼ中央で最も高く70cmである。

右副室は1m×1.5m、左副室は1.2m×1.4mであり、床面の傾斜は6°で焼成室と床面での境はなく平坦である。側壁はほぼ垂直に立ち上る。残存する壁の高さは、右副室で80cm、左副室で70cmである。なお、右副室床面から木炭片が出上した。

### （煙道）

煙道は、入口幅40cm、奥壁幅60cm、奥行60cmのもので、焼成室から煙道への床面での境はなく平坦である。壁は内傾ぎみに立ち上り、その残在高は60cmである。また、床面に、直径20cmの陶器窯で使用されていたものと同じ焼台1点がみられた。煙道内の施設として使用されたかはわからない。

## 6. 第1号窯跡（第16図、図版3）

残存する遺構は、煙道と右副室と焼成室の一部で、その形態は第8号窯跡と同じと推定される。堆積層から壺の体部破片が1点出土している。

### （焼成室）

右副室は、1.3m×1mの楕円状のもので、床面での焼成室との境はなく、その傾斜は7°で

ほぼ平坦である。床面には厚さ約2cmの炭と灰からなる層が堆積しており、その中には長さ約7cmの木炭もはいっていた。側壁は床面よりほぼ直角に立ち上る。壁の残存高は、70cmである。壁面には、窓体掘削時の工具痕が残っている。

(煙道)

煙道は、側50cm、奥行50cmの方形状のものである。壁はほぼ垂直に立ち上り、残存高は40cmで一部にタールがみられた。煙道の入口右側に、床面にそって高さ18cm、幅10cmの石を貼り付けスサ入り粘土によってかためていた。これは障壁の一部であろう。

## 7. 第6号窯跡（第17図、図版7）

残存する遺構は、煙道の奥壁と左右副室の一部で、壁は、右副室奥壁部分で約60cmで残存する。

その形態は第8号窯跡と同じと推定される。

## 8. 第7号窯跡（第18図、図版7）

残存する遺構は、焼成室の一部と左右副室と煙道である、その形態は第8号窯跡と同じと推定される。

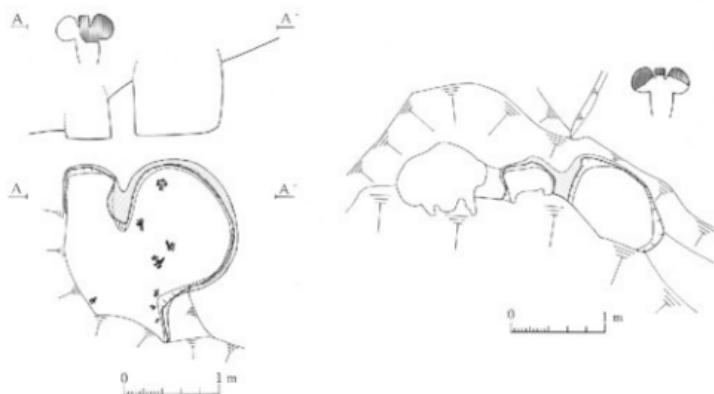
中軸線の方向は北で68°東へ偏している。

(焼成室)

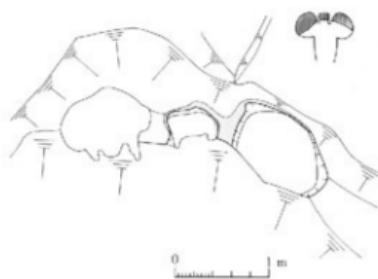
右副室は40cm×80cm、左副室は50cm×70cmで、隅丸の長方形を呈し、床面での焼成室との境ではなく、その傾斜は7°でほぼ平坦である。床面には厚さ約2cmの炭と灰からなる層が堆積していた。側壁は床面より内傾ぎみに立ち上り、その残存高は、右副室奥壁で最も高く1mである。

(煙道)

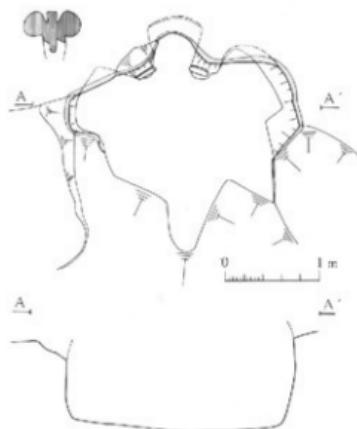
煙道は、入口幅40cm、奥壁幅60cm、奥行60cmである。側壁は内傾ぎみに立ち上り、残存高は1mである。原道入口に当る左右に突き出した壁の前方に、床面より13cmの高さに石を貼り付け粘土上で補強している。左右の石はほぼ同じ大きさである。それは障壁の一部である。また、煙道内に長さ60cm×幅20cmの板状の粘板岩が落ち込んだ状態で出土した。



第16図 第1号窓跡平面図など



第17図 第6号窓跡平面図



第18図 第7号窓跡平面図など

## IV 考察

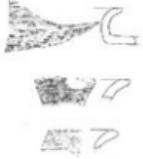
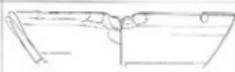
水沼窯跡については表探資料に基づいて、藤沼が若干の考察を行ったことがある(文献1)。その見通しは発掘によっても大きく変わることはなかったので、重複する部分もあるが、あらためて述べてみたい。

### (技術的な問題について)

水沼窯跡で陶器を生産した窯跡が3基(第3・4・5号窯跡)発見された。保存の比較的良好な第4号窯跡でわかるように、燃焼室と焼成室との境に大きな分焰柱をもつ地下式窯窓で、東海地方の瓷器系の窯跡と共通する。一般に渥美窯は、焚口から分焰柱にかけての燃焼室の床面が急角度で下降し、分焰柱直後の焼成室の床面が、窯のもっとも低い部分となり、そこから、床面が急角度で上昇する傾向をもつといわれる(文献3)。水沼第4号窯跡も分焰柱直後の焼成室床面にはほとんど平坦な部分がなく、すぐに急角度で上昇するので、渥美窯の構造に近いものと推定される。また、床面にも粘土をまるめた焼台が使用されていた。

水沼窯跡から出土したものを窯跡別・器種別に整理したのが第19図である。器種としては、壺・甕・擂鉢・碗・羽釜がある。壺は大小中あり、大形品は口径約22cm、器高が43cm以上のもので、袈裟攤文がつく。中形品は口径約15cm、小形品は口径約11cm、器高約26cmである。このほか第3号窯跡から以前に出土した短頭壺がある。甕に関しては良好な資料が得られなかつたが、すべて頭部が短く口縁が外反する器形である。口縁先端のつくりはそれぞれ異なり、丸く仕上げてあるもの、わずかに屈曲して縁帯を形成するもの、肥厚するものなどがある。擂鉢に関しては良好な資料はない。内湾気味に体部が立ち上がり、口縁先端を丸く仕上げている特徴はすべてのものに共通する。法量による相違は不明である。碗は口縁を欠く資料で高台がつき、重ね焼きの痕跡をもつものである。東海地方の山茶碗に類似する。羽釜も全体の形はわからない。東海地方の中世陶でもしばしば羽釜は焼成されているが、その生産は平安時代末期に限定されるようである(文献4)。なお、上記の資料のうち最終焼成時の一括資料とみられるものは、第3号窯跡の大・中・小の壺と短頭甕に限定され、他のものは焼台として使用されたものが含まれていると思われる。

陶器の製作技法をみてみよう。成形は基本的には粘土紐巻き上げ成形で、各器種に共通する技法である。甕と壺の一部には叩き縮めが行なわれている。成形後の器面調整は器種によって若干の相違がみられるが、ヨコナデ調整・ヘラナデ調整・ヘラケズリ調整が中心になっている。ヨコナデ調整やヘラケズリ調整の中には回転力を用いたと考えられるものがある。概して、内部の器面調整は渥美窯製品より丁寧な印象をうける。袈裟攤文を描くには半截竹管を使用しており、力強くはっきりと線を引いている。なお、製品の多くは還元焰によって黒っぽく焼締め

	第3号墓 路	第4号墓 路	第5号墓 路
壺			
A			
壺			
B			
壺			
C			
壺			
D			
盤			
盤			
鉢			
鉢			
鉢			
漆羽筆			

第19図 器種構成図

られているのが大きな特徴となっている。灰釉を施したものはない。胎土を観察すると、①白色粒を含み灰赤色・にぶい赤褐色を呈して割れ口が比較的滑らかになるものと、②砂を含み暗青灰色を呈して割れ口がザックリとした感じのもの③砂を多くふくみ赤褐色・緑灰色を呈し割れ口の荒々しいものと大体3種類に分けることができる。①・②の胎土は器種による相違はないが、③の胎土は羽釜に限定される。なお、胎土の特徴には渥美窯製品特有の砂っぽい胎土とはかなり異なるので、水沼窯製品と渥美窯製品を区別するのに大いに役立つ可能性があるとみている。

上記で明らかにした窯構造や製品の特徴、焼成技法などの特徴からみて、水沼窯は渥美窯の系譜に属するものといってよい。東北地方における平安時代後半の須恵器窯跡の研究はおくれているが、水沼窯は古代の須恵器生産の技術から直接的にうまれてくるようなものではない。おそらく、渥美半島から工人が直接この地にやってきて窯を築いたのであろう。東海地方の瓷器系初期中世窯の技術が意外と早く地方へ拡散したことを見示すものと考えられる。

#### (年代について)

水沼窯の年代については、もっとも特徴的な第3号窯跡出土の袈裟襷文壺を手掛りとして考えてみたい。袈裟襷文壺は、北は岩手県から南は愛媛県まで分布する（文献5）が、その出土数は少なく、水沼窯を除くとこれまで9遺跡で確認されているにすぎない。その生産は専ら渥美窯で行われたといわれ、大アラコ2号窯跡（愛知県渥美郡田原町）で確認されている（文献6）。大アラコ2号窯では「三河國司藤原朝臣顕長」の銘のある短頸壺も袈裟襷文壺と一緒に焼成されているので、顕長の国司在任期間から窯跡の年代は、保延2年（1136）から久寿2年（1155）までに限定されるという（文献3）。また、植崎彰一氏の三筋文系陶器の研究（文献5）によると、袈裟襷文が蓋の胴下半近くまで施されるものは、袈裟襷文壺の中ではもっとも古く、渥美三筋文陶器編年図の第Ⅱ期（12世紀第Ⅰ四半期）に位置づけられ、大アラコ第2号窯跡のものより古いとされており、平泉金鶴山経塚出土の袈裟襷文壺がその時期にあてられている。以上の見解に従えば、水沼窯第3号窯跡の袈裟襷文壺は、植崎氏の同編年図の第Ⅱ期にもっとも近いものとなる。また、甕についてみると、水沼窯第3号・5号窯跡出土のものの口縁部は、その形態が渥美大沢下第4号窯跡から出土しているものと類似し、水沼4号窯跡出土のものは、同じく渥美大沢下第4号窯跡から出土しているものと類似するので、小野田勝一氏の編年（文献3）では渥美窯第Ⅰ型式（平安時代中葉から鎌倉時代初頭まで）に比定されることになる。

今回は、最も実年代を推定しやすい袈裟襷文壺を焼成している事実を重視して、大アラコ2号窯の資料と植崎氏の見解を手掛りに、水沼窯の年代を12世紀の第Ⅰ四半期あるいは第Ⅱ四半期、すなわち12世紀前半代と考えたい。

### (生産の背景)

以上で、水沼窯跡が12世紀前半に属し、渥美半島から直接、工人がやってきて陶器生産を行ったと推定してみた。では誰が何を目的として工人を連れてきたのだろうか。これは水沼窯跡が発見されたばかりで、その製品の分布がまだよくわかっていない段階ではきわめてむずかしい問題である。しかし、12世紀前半の時期に、約800kmもはなれた渥美半島から、袈裟揃文壺など高級品の生産に従事していた工人を直接に石巻地方に連れてくることのできるのは、平泉藤原氏以外にはなかろう。次に東北地方出土の袈裟揃文を手掛りとしてこの問題を考えてみたい。資料は次の5点であり、四遺跡から出土している。数は少ないが岩手県内で、しかも平泉とその周辺（金ヶ崎町）に集まっているのが注目される。

- |                           |         |
|---------------------------|---------|
| (1) 金鶴山経塚（西磐井郡平泉町平泉字花立）   | (文献7・8) |
| (2) 西根遺跡（胆沢郡金ヶ崎町西根字原添下）   | (文献9)   |
| (3) 西根遺跡（胆沢郡金ヶ崎町西根字原添下）   | (文献9)   |
| (4) 鳥海B遺跡（胆沢郡金ヶ崎町鳥海）      | (文献10)  |
| (5) 柳之御所跡（西磐井郡平泉町字平泉柳之御所） | (文献11)  |

(1)は高さ38.8cmの大形品で、口頸部が小さくしまり、刷がまるくふくらむ器形である。肩に輪がみられる。各種の図録に紹介されている資料で、横崎氏の渥美三筋文陶器編年図では第Ⅱ期（12世紀第Ⅰ四半期）に位置づけられている。(3)と(4)は小破片で沈線と灰釉がみられる。(2)～(4)の年代は12世紀前半と報告されている（文献9・10）。(5)はI縁から肩部にかけての破片で、自然釉がみられる。生産地は5点とも渥美窯製品と推定されるもので、水沼窯のものと現物を比較してみたが、灰釉が施されている点（(1)～(4)）や砂質に富んだ白っぽい胎土（(1)～(5)）はそれとまったく異なるものである。

しかし、渥美窯の袈裟揃文壺が平泉とその周辺に集中していることは、同じ袈裟揃文壺を焼成している水沼窯のものも平泉とその周辺に供給された可能性が高い。12世紀前半代といえば、平泉では清衡の中尊寺造営、次いで基衡の金堂円隆寺（毛越寺）造営などがさかんに行われた時期である。一方、当時国内で装飾文をもつ壺類を生産していたのは、東海地方の猿投、渥美、常滑などの限られた地域であった。平泉藤原氏は、渥美や常滑地方から寺院や居館の調度品・経塚の埋納用品として必要な高級陶器の買入れると同時に、渥美半島から工人を招いて現地生産の場として水沼窯を築かせたのではないかだろうか。勿論、壺の一部や壺・擂鉢・椀・羽釜などは日常的な実用品としても使用されたと考えられる。今後、平泉を中心とする地域や平泉藤原氏と関係する各地の宗教施設（寺院・経塚・役所跡など）で水沼窯製品が出土することを期待したい。

なお、平泉附近で調査された資料をみると渥美製品のほかに常滑製品も多数出土している（文

文献12）。金雞山経塚でも前記の袈裟拵文豪のほかに常滑窯の壺をいくつか出土している（文献13）。また、岩手・宮城・福島・山形県では併せて30ヶ所、34個の二筋壺が出土しているが、その殆んどは常滑製品である。したがって、なぜ知多半島ではなく渥美半島から工人をつれてきたのかも問題になるであろう。この選択は平泉藤原氏と結びつきの強い中央権門と渥美半島との関係でみちびきだされるもので、平安時代末期の窯業生産に於いて、中央権門と地方豪族とのかかわりを具体的に示す例として重要である。こうした問題もこれから調べなければならない大きな課題である。

#### (その他の問題点)

地理的にみて、なぜ石巻地方の水沼を選定して窯を築いたのであろうか。観自在王院の東側に鈴沢という瓦窯跡があるので（文献14）、平泉周辺でも陶器窯が発見される可能性はないとはいえないが、今のところ未確認である。単純な推測であるが、渥美の工人が大西洋岸沿いに舟でやってきたとき、まず石巻に上陸し、水沼の地に粘土など窯窓に充分な条件をみつけたからであろう。石巻から平泉までの距離は直線にして約65kmであるが、水沼窯の製品を運ぶには北上川の水運を利用できた筈である。これまで江戸時代初めの漸替え工事以前は、北上川は石巻湾にそそがず、河北町の追波湾にのみ流れこんでいたといわれてきたが、最近では、現在の流路とあまり変化していないとの説も有力である（文献15）。したがって、石巻地方は、北上川の河口の港として、平泉藤原氏にとっても重要な地域であった可能性がある。

ところで、水沼窯はその後どうなったのであろうか。そのまま地場産業として定着し、発展した痕跡は今のところ発見されていない。おそらく、平泉藤原氏による寺院・居館などの建設の一環として築窯されたため、短期間しか操業されなかったのではないか。宮城県地方で再び陶器生産が開始されるのは、それより百年以上あとの13世紀後半になってからで、あらたに常滑窯などから技術導入が行われている。生産品も、農民を対象とした日常雑器としての壺・甕・擂鉢で、水沼窯とは性格的にもことなるものであった（文献13・16）。

#### (陶器を出土しない窯について)

最後になったが、陶器を出土しない窯について考察を加えたい。陶器を出土しない5基の窯跡は、陶器窯とは全く異なる構造を呈する。それらは、煙道の左右に副室をもつもの（第1号・6号・7号・8号窯跡）ともたないもの（第2号窯跡）に分類されるが、その他の特徴は共通するとみられる。それは、①陶器を出土しない。②窯体内部の床面がほぼ平坦である。③煙道が垂直に立ち上がる。④陶器窯とくらべて小形で、焼成室の壁の焼きしまりが少ない。⑤床面に2~3cmの炭・灰の堆積がみられるなどである。⑥煙道部周辺にタールを附着させているものがある。以上のことから最も可能性があるのは炭窯であろう。煙道部の構造は次橋窯跡（宮城県松山町）（文献17）で発見されたものに類似する。年代を示す出土品はなく、また陶器窯との切合いも

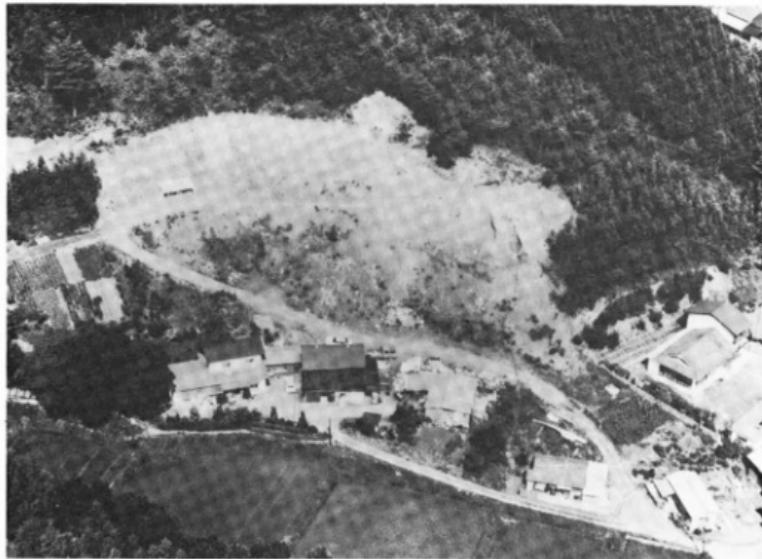
ないので、陶器窯との新旧関係はわからない。しかし、陶器窯と同じ高さに位置し、ほぼ南北と一例に並び、しかも陶器窯と重複関係がないことは陶器窯と同時存在したことを示すのではないかろうか。深美半島やその他の地域での類例の発見を期待したい。

## 文 献

1. 藤沼邦彦・中村光一「袈裟撲文を出土した石巻市水沼窯跡」『研究紀要第8卷』東北歴史資料館 1982
2. 宮城県高等学校理科研究会『宮城県の地質案内』 1975
3. 小野田勝一・赤羽一郎「常滑・瀬美」『日本陶磁全集8』中央公論社 1977
4. 杉崎章他『常滑窯業誌』常滑市誌編纂委員会 1975
5. 楢崎彰一「初期中世陶における三筋文の系譜」名古屋大学文学部研究論集LXXIV 1978
6. 小野田勝一他「大アラコ古窯址群」 1973
7. 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録・経塚造物篇』 1967
8. 楢崎彰一「瀬戸・常滑・瀬美」『日本の陶磁古代中世編』 1975
9. 八重樫良宏・鈴木明美「西根遺跡」『岩手県文化財調査報告書59』 1981
10. 八重樫良宏・鈴木明美「鳥海B遺跡」『岩手県文化財調査報告書59』 1981
11. 平泉町教育委員会「柳之御所発掘調査報告書—第11・12次発掘調査概要—」 1984
12. 菊地郁雄・三上昭・昆野靖「毛越遺跡」『岩手県文化財調査報告書54』 1980
13. 藤島玄治郎編「平泉一毛越寺と觀自在王院の研究」 1961
14. 平泉町教育委員会「錦沢地区緊急発掘調査(略報)」
15. 河北町誌編纂委員会『河北町史』下巻 1979
16. 藤沼邦彦・桑原滋郎「東北地方の古代・中世窯」『日本やきもの集成1』 1981
17. 渡辺泰伸他「次橋須恵器窯跡発掘調査報告」『松山町文化財調査報告書第1集』 1983

## あとがき

水沼窯跡の発掘は8月5日から8月24日まで行われ、盆の休暇などをを利用して多数の方々に調査に参加していただいた。地主である三浦次郎氏には御家族ぐるみのお世話を受けた。また発掘中には芹沢長介先生（元、東北大学教授）から、発掘後には名古屋大学榎崎彰一先生から現地でご指導を受けた。また水沼窯跡の出土品は東北歴史資料館の「東北の中世陶器」展（昭和58年9月17日～11月13日）に出品したため、この期間に展示を見られた方々からも多数のご教示を得ることができた。報告書作成にあたっては、愛知県陶磁資料館の柴垣勇夫・赤羽一郎・井上喜久雄、福井工業専門学校の荻野繁春、福井県立陶芸館の田中照久、一宮市の江崎武、田原町の小野山勝一、名古屋大学助手の斎藤孝正、国立上野博物館の矢部良明、平泉町文化財センターの本沢慎輔、東北歴史資料館の佐々木光雄・小井川和夫の諸氏から有意義な意見を聞くことができた。また、宮城県教育庁文化財保護課の平沢英二郎氏・佐藤茂氏にも行政的な面でお世話をいただいた。以上の方々のご好意に対し、記して感謝の意を表したい。



航空写真



遺跡遠景

図版 2

近景 1



近景 2



近景 3



第8号窯跡  
第2号窯跡全景



(右下)  
第1号窯跡



第2号跡煙道から  
第8号窯跡をのぞむ



第2号窯跡煙道（正面）



第2号窯跡煙道（上から）

図版 4

第 8 号窯跡  
(東から)



第 8 号窯跡煙道



第 3 号窯跡  
(北から)



第3号窯跡正面図  
(左側)



第4号窯跡正面図



第4号窯跡 (焼成室から分焰柱をのぞむ)



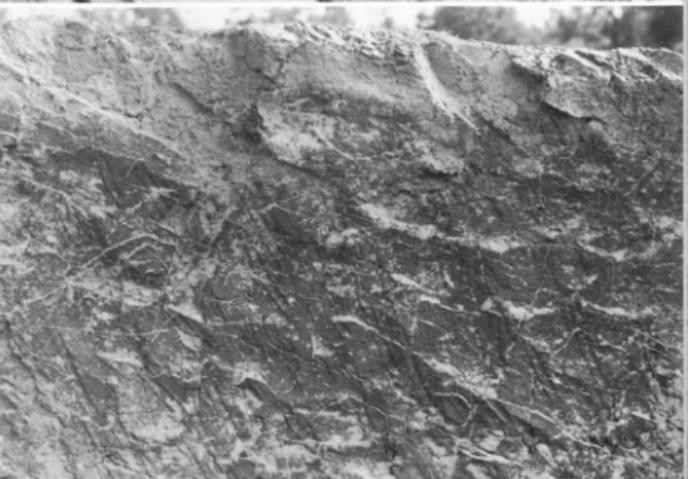
第4号窯跡 (焼成室から煙道をのぞむ)

図版 6

第4号窯跡分焰柱



第4号窯跡壁面  
(焼成室中央右側壁)



第4号窯跡焼成室焼台跡



第5号窯跡全景  
(東より)



第6号窯跡全景  
(西より)



第7号窯跡全景  
(西より)



图版 8

第3号窑跡出土  
袈裟揷文壺1



第3号窑跡出土  
袈裟揷文壺2



第3号窯跡出土 壺5



壺3



壺4

第3号窯跡出土 壺



壺6



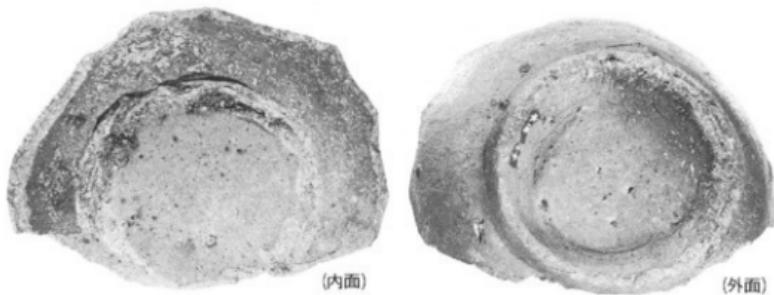
第3号窯跡出土 壺1



第4号窯跡出土 壺1

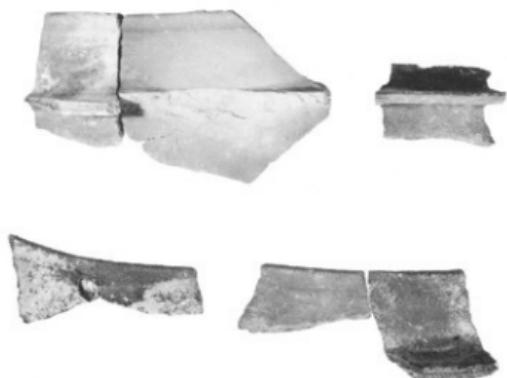


第4号窯跡出土 壺1



第4号窯跡出土 梗 1

第4号窯跡出土 羽釜 1



第4号窯跡出土  
押印のある陶片



第5号窯跡出土 捣鉢 1



第5号窯跡出土 捣鉢 1



第5号窯跡出土 捣鉢 2



参考資料  
平泉金鶏山出土袈裟禪文壺



---

石巻市文化財調査報告書第1集  
水沼窯跡発掘調査報告

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 石巻市教育委員会  
宮城県石巻市日和が丘一丁目1番1号  
☎ (0225) 95-1111 (代表)

印刷 株式会社 東北プリント  
仙台市立町24-24 ☎ 63-1166

---

